

8月13日に定期健診を呑気に受けに行った日、腹部に炎症があるので、検査入院となったという電話を夫から受けて、びっくり仰天、スーツケースに入院に必要なものを詰め込んで駆けつけて以来、時間と事態が怒涛のように流れていきました。いろいろと綿密な検査を受けている間に、本人は炎症が悪化していきました。8月初旬には元気一杯で活動していたのにと、信じられない思いでした。病気がこんなに早く進行するものかと驚きましたが、予想もしない悪性リンパ腫という病名が告げられたのは8月の末でした。

けれども悪性リンパ腫に関しては、かなり前に診断されてもさほど進行せずに日常生活を送っている方、回復された方、また急激に悪化して亡くなられた方など、身の回りに罹患した方々がおられることを知っていましたので、主治医の説明を熱心に聞き、「完治の希望をもって、厳しい治療に入る」との言葉に信頼して、9月から抗がん剤治療に入りました。腫瘍が生じたリンパ節の腫れは急激に引き、効果の大きさに驚きました。

抗がん剤はがんのタイプによって種類があり、組み合わせがあり、投与の期間がそれぞれであるようでした。3週間ごとに1セットの抗がん剤が9日間に渡り投与され、6~8回のサイクルで継続していきます。そのほかに副作用に対処する補助治療の薬剤もあります。腹部の炎症のため、絶食となり、栄養も点滴で補給します。文字通り、命の糸のような点滴の管につながる病床となりました。



様々な副作用は出て来ても、比較的軽めに感じられていましたが、最後の9日目の抗がん剤を受けた直後から、急に39度以上の発熱となり、生まれて初めて体験した苦しみとなりました。また、白血球も40に低下し、想像を超える数字となり、頭や脇の下をアイスノンで冷やしながらか、抗生剤で熱を下げる、すぐにまた上がる、下げるという繰り返しが続きました。

手を組み、身動きもせず、じっと横たわっていました。苦しいせいか、言葉も不明瞭になり、私はただそばで見守るだけでなんの手助けもできませんでした。6日間ほど、なかなか熱の引かない様子に、感染症も起こっているということも考えられました。

やがて、首に刺す点滴用の穴にカビが発生していることが判明し、処置を受け、点滴の場所を腕に変えてから、熱が下がりだしました。これは医療ミスではないか、と私は思いましたが、カビはよく生じるようで、免疫力が低下したとき、これが感染症になるという説明を受けたと言います。「日和見感染」という言葉を聞いていましたが、健康な時は発症しないはずの、どこにでもいる小さな細菌がこんなにも悪さをするのだと分かりました。熱が出た時は悪寒がひどく電気毛布、冬用パジャマ、毛糸のカーディガン、ガウン、綿入れ半纏などを総動員しても耐えられないような思いになったようです。汗もひどくかいて、パジャマの洗濯にも追われました。



熱が下がると本当に生き返ったようなすっきりした気分になったと言います。私は番茶を入れてあげたり、ひげを剃ったり、清拭をしたり、両足のマッサージをしたりして、患者を慰めることが出来る平穩にもどりました。けれども絶食ですし、体力も消耗しており、血液細胞もダメージを受けているので、主治医は安静、体力の回復をまず図ってから

次のステップだと言われました。まだ、1サイクルも終了していません。本当に厳しい治療ですが素早い適切な処置と看護を受け、絶えず検査しながら、とりあえず進んでいるところでしょうか。